

好奇心や探究心を育む環境構成と援助の工夫 ～砂や土とかかわって遊ぶ楽しさを通して～

那覇市立神原幼稚園教諭 上原 かをる

テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境は、核家族や少子化の増加で異年齢とのかかわりが減少し、情報や映像文化の発達に伴い室内中心の遊びが増加してきている。また、都市化の進展で幼児の遊び場や自然が失われ、幼児が友達と一緒に身近な自然に直接かかわって遊ぶ機会が減少している状況がある。

幼稚園教育要領「第1章 総則」の幼稚園教育の基本理念として、幼稚園教育は「環境を通して行うものである」と打ち出している。また、幼稚園教育要領解説「環境」の領域の中で「環境に対して、親しみ、興味をもって積極的にかかわるようになることが大切である。さらに、ただ単に環境の中にあるものを利用するだけではなく、そこに気付いたり、発見したりしようとする環境にかかわる態度を育てることが大切である」と述べられている。

幼稚園においては幼児の周りすべてが環境であり、その身近な環境に触れる・聞く・嗅ぐ・見る・味わう等の五感を通して直接かかわる事で様々な事象と出会う事となる。そして、事象に幼児が好奇心をもってかかわり、思いや感動を友達や教師等と伝え合い、感動を共有し合う事で様々な感情体験を得て、さらに遊びに興味をもち積極的にかかわろうとする意欲をもつようになる。また、環境にかかわる事によって「なぜだろう?」「どうして?」等の探究心や思考力を働かせる様な知的発達の基礎を培う事が大切となってくる。

では、本園の幼児の実態はどうであろうか。戸外で固定遊具や運動遊びでからだを動かしたり、砂や土遊びでは、その可塑性に富んだ素材の感触を楽しむ等、様々な遊びを楽しんでいる。

しかし、中には遊び方がわからず戸惑っている子や身近な自然にあまり関心を示さない子もいる。それは、幼児一人一人が自然に親しみをもって、触れ合いながら、イメージを実現して遊びを楽しめる環境構成づくりに対して教師の配慮が不足であったり、幼児の興味・関心に応じた教材・素材等への教師の工夫が足りなかったのではないかと考える。

そこで、幼児が身近な自然環境に親しみをもち、砂や土とかかわって遊ぶ直接体験を重ねていく中で、幼児のイメージを広げ、好奇心や探究心をもって主体的に遊びに取り組める環境構成と援助の工夫について考えたく本テーマを設定した。

研究目標

幼児が身近な環境にかかわり、好奇心や探究心を育む環境構成と援助の工夫について研究する。

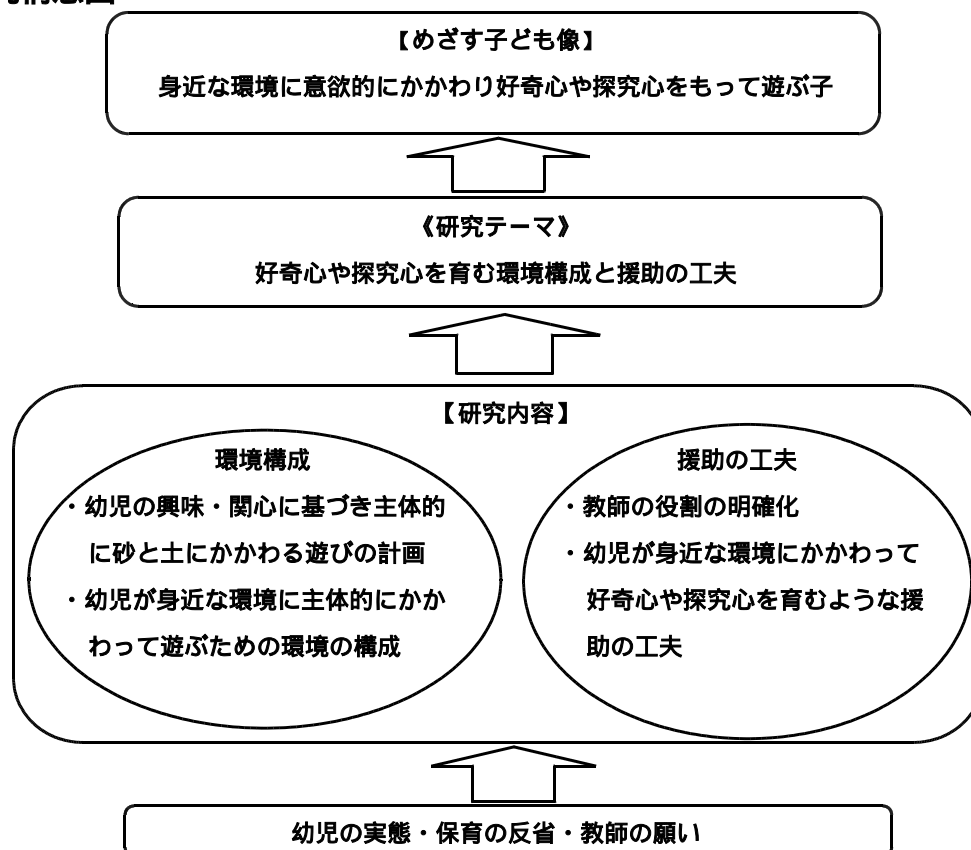
研究方針

- 1 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」について理論研究する。
- 2 幼児が身近な環境に好奇心や探究心をもち、積極的に砂や土遊びにかかわるような環境構

成の工夫について研究する。

- 3 幼児が身近な環境を通して様々な感情体験を得るための教師の援助について研究する。

研究構想図



研究内容と方法

1 幼児期の好奇心や探究心の理解

平成12年4月1日から新しい幼稚園教育要領が実施され、その改訂の基本的な方針の一つとして「幼児期にふさわしい知的発達を促す教育の在り方を明確に示すこと」があげられている。

そこで、幼児の知的発達について理解した上で、幼児の好奇心や探究心に視点をおきながら、研究を進める。

なお、本研究における「幼児」とは、学校教育法第80条で制定された「満3才から、小学校就学の始期に達するまでの幼児」とする。

(1) 幼児にとっての知的発達とは

幼児の知的発達とは、知識や技能の獲得のみならず、幼児を取り巻く物的・人的環境はもちろん、時間・空間的環境も含めたすべての環境に対して、からだ全体を通して、出会ったものに五感を生かして直接的・主体的にかかわる事で、その意味や内容・扱い方等を理解し、自分なりに工夫をしていく意欲や態度であると捉える。

そのため、幼児の知的発達を促すためには、実体験を豊かにするような環境を構成する必要がある。その環境に幼児は遊びを中心としてかかわり、様々な現象や事物と出会い、

自ら考え表現したり，具体的に理解し，判断するという経験の繰り返しを積み重ねて，それを幼児自身が生活や遊びに取り入れる力を培う事が大切である。また，その経験で得た様々な思いを，友達や教師に伝え感情を共有し合っていく事も幼児の知的発達 of 育ちにとっては大切な要因となる。

(2) 幼児期の好奇心・探究心の理解

幼児の知的発達の基礎は，好奇心や探究心の芽生えにより培われる。

幼児の好奇心とは，園生活のすべての環境や未知の場面との出会いに対して「なんだろう」等，興味・関心を抱く心の動きである。この好奇心の芽生えが，環境に対して立ち止まって考えたり，何かを感じたり，新たな気付き等の内面の動きを生じる事となる。そして「面白そう」等と環境に対し好奇心をもってかかわる事で，不思議に思う事や発見・疑問，戸惑い，葛藤等の様々な感情体験を得ながら，幼児なりに様々な方法を試行錯誤し繰り返す事で「もっとかかわりたい」と意欲をもつようになる。

また，幼児の探究心とは，好奇心を伴いながら，この一連の過程を繰り返し，その事象に対して「もっと詳しく知りたい」と思う心の働きと捉え，幼児が，物事を知る喜びや深く考える楽しさを実感する事であると考ええる。

幼児期の好奇心や探究心は，幼児が身のまわりの環境へかかわりをもつ入り口であり，小学校以降の生活や学習の基盤となって幼児一人一人の「生きる力」の基礎を培うと考える。

2 幼児にとっての身近な環境

(1) 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」

幼児の身近な環境とのかかわりとして幼稚園教育要領の領域「環境」では，「環境に積極的にかかわる力」「生活に取り入れていこうとする態度」を培う事が重要視されている。

つまり，幼児が身近な環境にどのようなものがあるかを知り，興味や関心をもってかかわる中で，思いを自分の中に取り入れて楽しみ感動し，好奇心や探究心をもって主体的に活動ができるようになる力を養う事が基本となると考える。

幼児は身近な環境に直接かかわる事で，興味や関心をもち，好奇心を抱きイメージを広げて環境との触れ合いを楽しむようになる。環境とのかかわりを通して，幼児は自分の思いを共感し合える仲間と出会ったり，試行錯誤しながら探究心を育む事となる。このような知的な経験の積み重ねから，物事の性質や仕組み等に気付き，それを生活や遊びに取り入れていく態度へとつながると考える。

また，身近な動植物を含めた自然環境に直接的・具体的に触れる体験を通して，自然の美しさ・神秘さや生命について等，人為的ではない不思議な力への関心をもつと考える。自然や生命あるものへ親しみをもちかかわる事で，自然の変化・特徴に気付き受け入れ理解していく力や自他の生命の存在に気付き，命を尊重し生きる事の素晴らしさを感じる態度を培うと捉える。

そして，幼児の日常生活の環境の中では，様々な文字や数字・記号との出会いがあり，遊びを通して目にしたり，何度も使ってみる事で，物の本質や法則性に気付き，興味・関心をもって文字や数字にかかわる感覚を豊かにすると捉える。幼児の生活にとって文字・数字・記号・標識等は，周囲と幼児との思いを伝え合ったり，表現する手段であったりする等，幼児自身が必要性を感じて生活や遊びに取り入れていく事が大切であると考ええる。

(2) 幼児が主体的にかかわるような環境の構成

園生活における幼児の身近な環境として人的環境には、幼児自身を含め、教師や友達・保護者・地域の人等、幼児とかかわりをもつ様々な「人」であり、物的環境としては、建物や設備・遊具（固定・移動）・製作物や素材、広く通信機器等も含めた幼児とかかわりをもつすべての「もの」である。また自然環境には、虫・動植物・砂や土等の自然物、雨・風等の自然現象といった幼児を取り囲むすべての自然が含まれ、時間・空間・雰囲気等も幼児にとっては身近な環境である。これらの環境要素が関連し合って結びついた身近な環境に、幼児が主体的にかかわり、原体験を通して環境からの応答を受けるという相互作用が、幼児の発達を促すと教師が理解し、幼児の視点に立って「計画的な環境の構成」をする事が大切である。

「計画的な環境の構成」をするためには、幼児一人一人が環境とかかわり、知的面を刺激し豊かな体験を重ねていけるような物的・空間的な環境の構成をする必要がある。幼児の発達に即し遊具や用具、素材等の種類や数量・配置等を考慮しながら環境の構成をする。そして、同じ物的・空間的な環境であっても、幼児一人一人の興味や関心、これまでの経験の違いや受け止め方で、その環境のもつ意味は違ってくる。そこで教師は、幼児の発達の時期や次の段階の発達の見通しをもって、環境を構成する事が大切となる。

時には、教師の予想を越えた活動展開になる事もあるが、教師は柔軟性をもって幼児に一方的に環境を与えるのではなく、幼児からの刺激も受け入れながら環境をつくる仲間として、幼児にとって意味のある魅力的な環境に再構成する必要もある。

(3) 砂や土遊びに関する環境構成の工夫

本研究においては、幼児が戸外遊びの中で、興味・関心をもって取り組んでいる砂や土遊びとのかかわりについて視点を置き、年間指導計画を表1のように作成する。

表1 砂や土遊びに視点を置いた年間指導計画

	4月～6月（期） （砂や土に親しむ）	7月～11月（期） （砂や土で楽しく遊ぶ）	12月～3月（期） （砂や土を使い工夫して遊ぶ）
予想される幼児の姿	○ほとんどの幼児が砂や土遊びにかかわっているが、中には砂遊びの経験が少なく、戸惑っている幼児もいる。 ○数人の幼児が、かかわって遊んでいるが、平行遊びが多く、遊ぶ仲間としてののかかわりは少ない。 ○砂に触れる、握る、固める、すくう等、砂に親しみを感じて遊ぶ。	○砂遊びを通して水を使い、泥んこ遊びや泥水遊びをする事で、砂の性質に気付く。 ○砂遊びを通して、他児と話をしたり、遊びの真似をする等、幼児同士がかかわりながら、遊びに取り組むようになる。 ○山やダムづくり等、砂場空間を広く活用し、からだを使って伸び伸びと遊ぶ。	○幼児同士のつながりが深まり、遊びの中で役割を分担したり、お互いの思いを伝え、協力して一つの遊びに時間をかけて取り組むようになる。 ○遊びに見通しをもって、色々試したり、工夫したりして目的をもって遊ぶようになる。 ○遊びの内容に応じて、色々な素材・道具等、自分の思うように使う事ができる。
好奇心や探究心	○砂や土の手触りを感覚的に味わう。（さらさら・ざらざら・つるつる等） ○園舎周辺にある身近な砂や土に興味・関心をもつ。 ○砂にも種類があり、その違い（感触・色等）に気付く。 ○だんごづくり、型抜き、砂に水を加	○砂と水とのかかわりで、砂や土・水の性質に気付く。 ○砂に水をかけると（吸い込む・色が変化する・形が変化する等）砂の状態が変化する事に気付く。 ○山・池・川・ダムづくり等、遊びを通して、大きさ・高さ・深さ等	○砂遊びを通して、大きさ・高さ・量等、大小の比較を感覚的に捉え、手や足等、からだで測る・棒等の素材で測る。 ○砂に加える水の分量の多少により、砂の状態が変わる事を知り、工夫しながら遊びに取り入れる。

を 育 む ね ら い	える等の色々な砂遊びを楽しむ。 ○乾いた砂と湿り気の砂では、色や固さが違う事に気付く。 ○砂場道具や用具を種類別にしっかりと分けて片付ける。	を感覚的に味わう。 ○砂の性質をいかし、様々な形をつかって遊ぶ楽しさを味わう。(丸・三角・四角・様々な型抜きを使って)	○遊びの目的に応じて、道具の種類や数を自分なりに考え・選んで遊ぶ。 ○砂の形を変化させたり、砂を様々な容器に入れて遊ぶ等、活動を通して、図形や数量・分量について感覚的に捉える。
環 境 構 成 援 助 の 工 夫	砂は常に清潔に保つように配慮する。 幼児が砂や土に親しみをもって、十分にかかわるように素手・素足での感触を楽しませる。 幼児が意欲的にかかわるように、幼児の動線に合わせて環境を構成する。 教師や他児と一緒にかわって遊ぶ楽しさを味わうように、幼児の思いに共感する。 幼児と共に、安全面や衛生面について確認し、配慮する。(砂を人にかけない・砂を口に入れない・砂場道具の安全な扱い方等)	砂場道具等は、種類・数を考慮し、配置するタイミングや幼児自身が片付けしやすいように表示する等の配慮をする。 手足についた砂は、よくはらって落とす・砂のついた手で目をこすらない等、清潔にする習慣を身につけさせる。 砂遊びの内容や必要に応じて、水の使用量を調整する。 幼児がイメージを広げ、考え・試すような素材を準備したり、空間を確保する等、環境構成の工夫をする。	遊びに連続性・継続性をもたせ、活動が十分にできるように時間を配分し、遊びに発展性をもたせるようにする。 幼児が疑問をもち、考えたり、工夫したりして遊ぶような発問の仕方・声かけの工夫をする。 気付き・驚き・発見・工夫等、幼児の内面の動きを捉え共感し、次の遊びに意欲をもたせるようにする。 砂場道具や素材等は、既製の物だけではなく、多目的に使用できるものを精選して準備をし、安全面にも配慮する。

(4) 幼児の主体的活動を促す教師の役割

幼児が主体的に環境にかかわるには、幼児が精神的に安定した状態であるように、教師は幼児を受け入れ「心のよりどころ」となる事が大切である。

教師は、幼児一人一人の発達を理解し、幼児が身近な環境から得た様々な思いや考えを丁寧に受け止める「活動の理解者」となる。そして、教師は、幼児と共に活動し思いを共有し合う「共同作業員」となる事が大切と考える。また、幼児が困難や課題に直面した時は、教師は幼児と共に悩み考えて、個々の育ちに応じた助言や援助を行う「遊びの援助者」となり、幼児自身のもつ力を伸ばし育む援助をする事が大切であると捉える。

教師が幼児と共に生活をする姿や人・物・動植物等に対して、いたわりや思いやりをもって接する教師の姿は、幼児にとっては真似をしたい憧れの存在となり「生活のモデル」であると認識する事が大切であると考えます。

幼児が主体的に活動するには、幼児と思いを共有し、お互いに相手のよさを認め合う友達の存在が大切である。そこで教師は、個々を理解して幼児同士をつなぐ役割を担い、仲間としてのかかわりが深まるように、友達・集団づくりの援助者であり、幼児・友達・教師との関連性をもたせる事も重要な役割として捉える。

3 好奇心や探究心を育む援助の工夫

(1) 幼児一人一人の内面に応じた教師の援助の工夫

幼児の好奇心や探究心の芽生えにとって喜び・発見・驚き等、内面の動きを共に楽しむ「人」の存在が大切である。園生活においては、教師が幼児と同じ目線で遊びにかかわり、様々な事象に好奇心や探究心を抱いて生活する姿を幼児に示す事が、幼児にとって刺激とな

り、幼児の好奇心や探究心を育み、思考力や判断力、表現力等の基礎を培う事につながると思われる。

そこで、好奇心や探究心を育む過程と教師の援助の工夫として下記の図1のように考える。

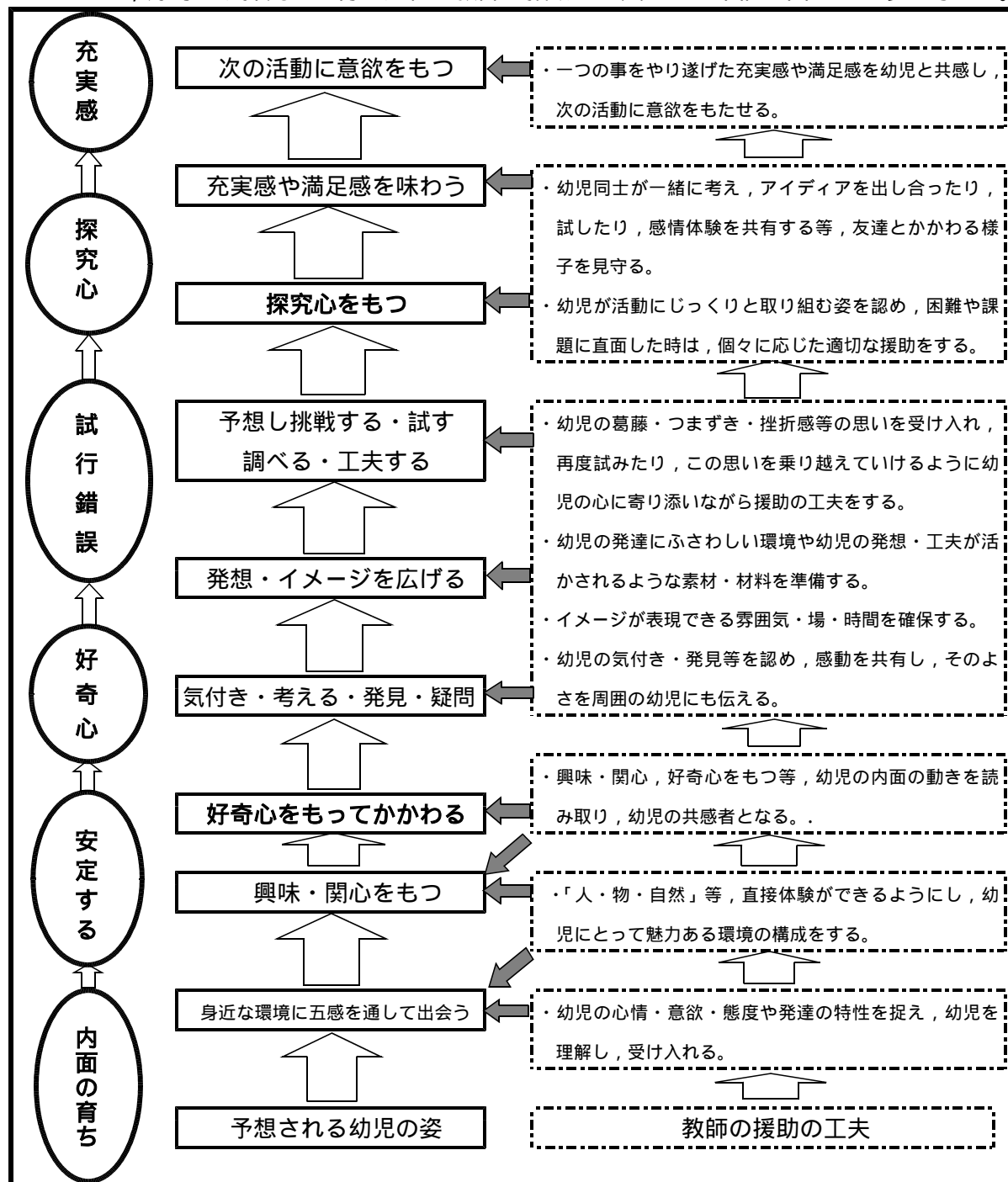


図1 好奇心や探究心を育む過程と教師の援助の工夫

(2) 友達とのかかわりを通しての援助

園生活を過ごす中で、幼児にとって欠かせないのが、様々な感情体験を共有する友達の存在である。

幼児が身近な環境に興味・関心、好奇心をもってかかわる時に、その気持ちを周囲の幼児に伝える。自分の思いを友達が受け入れて共感し合う事で、幼児は受け入れられている安心感を

もち、更に環境に対して意欲をもって取り組むと考える。

幼児は、友達と一緒に環境にかかわり、お互いのイメージを伝え合い、共に考え感動を共有したりする中で、友達に対し憧れの気持ちを抱き、真似をしたり、教え合う等、お互いに刺激し合う存在となる。この相互作用が、幼児同士のかかわり合う力を育むと同時に、個々の好奇心や探究心を培う事につながると捉える。

検証保育

1 検証保育までの実践

取り組み	ねらい ○内容	教師の援助	環境構成の工夫
第1回 (6 / 20)	五感を通し、いろいろな種類の砂や土があることに興味・関心をもつ。 ○身近な砂や土とかかわって遊ぶ楽しさを味わう。	五感を生かして園庭に様々な種類の砂や土があることに気付かせるための声かけをする。 砂場だけでなく園舎外にある様々な砂や土を探せるような声かけをする。 自分の集めた砂に名前をつけたり、友達の砂を見ることで砂に興味・関心をもたせる声かけをする。	子ども達が砂や土に興味・関心をもつような視聴覚教材を作成する。 集めた砂をみんなの前で紹介する場や展示する箇所を設ける。
第2回 (6 / 27)	砂の種類によって特徴が違う事に気付き、様々な遊びに取り入れる。 ○色々な種類の砂や土とかかわって楽しく遊ぶ。	新しい種類の土を取り入れる事で、砂や土にも色々な種類がある事に気付かせ、幼児が興味・関心をもつような声かけをする。 今までかかわった砂や土と、どんな風に違うのか気付かせる様な声かけをする。(色・感触等) 新しい土で様々な遊びが楽しめるように教師も一緒にかかわる。	島尻マージの土を準備し、園庭での土の置き場を工夫する。 様々な砂や土遊びができるよう道具を準備する。
本時 (6 / 28)	砂遊びの目的に合わせて様々な素材や道具を使い、工夫して遊ぶ。 ○身近な素材・道具を使って砂遊びをする楽しさを知る。	砂や土の性質やそれぞれの砂や土の特性を生かして、遊びに取り入れるような声かけをする。 幼児が考えたり、比べたり、試したりできるような素材や道具の精選に配慮し、思いっきり遊べるように援助する。	砂場道具や素材の個数・配置の工夫をする。 それぞれの遊びコーナーに応じた物的環境を工夫する。
第4回 (7 / 6)	様々な砂の状態がある事に気付き、遊びの目的に合わせて砂を使い分けて遊ぶ。 ○砂の状態を変化させ遊びに取り入れる楽しさを味わう。	砂の状態を試行錯誤しながら変化(硬軟・さらさら砂等)する楽しさを味わい、幼児がそれを遊びに取り入れるように援助する。 友達と一緒に砂遊びをしながら、お互いが遊びを共感する楽しさを味わえるように援助する。	幼児の動きに合わせて、道具等を精選し準備をする。 遊びに連続性があるように物的環境を工夫する。

保育実践による幼児の砂や土遊びの様子(写真)

砂場の砂を増やした時の様子



それ～！砂のお山だ！
高い！高い！

砂場でのダムづくり



僕たち工事のお兄さん！
まだ、工事中で～す！

赤土を使ったジュースづくり



おいしいオレンジジュース
いかがですか～。

2 検証保育指導案

(1) 題材「砂や土遊び」の意図

- ・可塑性に富んだ素材であり，何回も繰り返し楽しむ事ができる。
- ・自然に触れる戸外遊びにかかわり，十分にからだを使って砂や土の感触を楽しみ，解放感を味わうことができる。
- ・幼児のイメージを広げ，考えたり・工夫したりする等の幼児期における知的発達を促す事につながっていく事ができる。
- ・友達とかかわり，一緒に力を合わせて一つの遊びを楽しむ喜びを味わう事ができる。
- ・身近な素材や道具を使い，工夫しながら遊びを楽しむ事ができる。

(2) ねらい

- ・砂や土に興味・関心をもち，様々な素材や道具を使い工夫しながら楽しく遊ぶ。
- ・砂や土遊びを通し，友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

(3) 内容

- ・身近な素材や道具を使って，砂や土遊びをする楽しさを知る。
- ・友達とかかわって，砂や土遊びを楽しむ。

(4) 保育の視点

幼児が，自分の遊びの内容に合わせ様々な道具を使い，工夫して遊びに取り組んでいるか。

自分のイメージを広げ，会話をしながら友達と一緒に遊びを楽しんでいるか。

幼児が砂や土遊びを通して、考えたり・工夫したりして遊べるような道具や素材を準備しているか。

幼児が、砂や土遊びを楽しめるための環境構成ができているか。

(5) 保育指導案

時 間	予想される幼児の活動	教師の援助	環境構成
8 : 1 5	○登園する。 ・挨拶をする。 ・所持品の始末をする。	幼児一人一人と挨拶を交わしながら，心身の状況を把握する。	幼児一人一人と言葉を交わしながら，健康状態を観察する。
8 : 4 0	○園庭の花に水やりをする。 ○好きな遊びを楽しむ。 (室内遊び) 粘土・ぬり絵・ままごと等 (戸外遊び) 虫とり・砂遊び・鬼ごっこ等	幼児と一緒に水やりをしながら，植物の生長を共に喜び最後まで頑張っている姿を認める。 教師も一緒に遊びにかかわりながら，幼児の思いに共感し，遊びの内容に応じて幼児が意欲的に遊びに取り組む声かけをする。	水やりで使うじょうろ等を準備する。 遊びに必要な物は，幼児が取り出しやすいように配置し，種類別に分ける。
9 : 1 5	○片付けをする。 ・手洗い，うがいをする。 ○各グループごとに並んで座る。	一緒に片付けをしながら，幼児がきれいに片付ける心地よさを味わうような声かけをする。	遊びに使った道具等を片付けしやすいよう表示し，片付けをする場を知らせる。
9 : 3 0	今日の活動について話を聞く。 ・どの砂や土を使い，どんな遊びをしたいか，またどの道具や素材を使いたいか話をする。 ○園庭に移動し，砂や土遊びをする。	昨日の砂や土遊びを振り返りながら，今日の活動に興味・関心をもって取り組めるよう声かけをする。 安全面に配慮し，遊びの目的に合わせて移動させる。	今日の活動に意欲をもつよう絵カード等の視聴覚教材を準備する。 楽しい雰囲気の中で遊びに取り組めるようテーブルや椅子を準備する。

10 : 15	・砂場周辺 (といを使ったダムづくりやトンネル掘り等) ・赤土と島尻マージ周辺 (だんごづくりやジュース屋さん等) ・個々の好きな砂や土の場所で遊ぶ。 ○片付けをする。 ・道具等、汚れを水で洗い落として道具の種類別に分ける。 ○今日の活動を振り返る。 ・どんな砂や土遊びをして、何を感じたか、みんなで話をする。	個々の遊びに取り組んでいる姿を認め一緒に遊びにかかわり、その思いや気持ち等に共感し、更に意欲的に遊びに取り組む声かけをする。 幼児の動きを見て、砂や土遊びに取り組めない幼児や自分の思いを表現できない幼児には個別にかかわり、その思いを受け止めながら、砂や土遊びの色々な遊び方や道具を使って遊ぶ等、遊びの楽しさを味わわせるようにする。 遊びを工夫してる幼児や道具や廃材等を考えて使っている幼児のよさを受け止め、周囲の友達に伝える。 一緒に片付けをしながら、きれいに片付ける心地よさを味わわせるような声かけをする 道具の種類・大小など表示を見ながら片付けるように声かけをする。 最後まできちんと片付けできた幼児を認め、その頑張りをほめる。 幼児が興味・関心をもって活動の話をするような発問をする。 (五感を通して・友達とのかかわり・土の種類等) 幼児一人一人が、遊びの中で工夫していた事のよさを認めて、伝え合う。 今日の活動の話をしながら、次の活動に期待をもたせる声かけをする。	砂場道具を種類別にわかりやすく表示し、ワゴンに入れて準備する。 水やり用と砂遊び用のじょうろの使い方を意識した環境構成をする 幼児が自分なりに考えたり、試したり、比べたりする等して、工夫して遊びに取り組めるような道具を準備する。 (透明なじょうごを大小・ピーカー大中小・ペットボトル大中小・廃材を利用した様々な透明なカップ等) 使った道具等を洗うため、たらいに水を入れて準備する。 砂場道具の表示に合わせ、幼児と一緒に数を確認しながら片付ける 砂場近くで集まり、今日の活動を振り返る雰囲気をつくる。
---------	---	--	--

結果と考察

幼児の発達に即した環境構成の工夫や幼児を理解し、個々に応じた援助の工夫を通して好奇心や探究心をもって、身近な環境にかかわる楽しさを味わえる幼児が育つであろう。

【手だて1】幼児の動線を活かした環境構成の工夫

幼児が戸外遊びに意欲的にかかわり、砂や土遊びに興味・関心をもつような環境構成の工夫をした。

【結果1】新しい土との出会いによる幼児のかかわり

赤土とのかかわり

砂場において、砂を握る・砂を手で固める・山を作る等、砂の感触を味わいながら遊ぶ事が多かったが、園庭の木の下にある赤土の存在に気付いた幼児が、砂場と赤土の両方とかかわるようになり、幼児の砂と土遊びの動線が図1のようになった。赤土とのかかわりで、幼児は砂の種類で色や感触に違いがある事に気付いたようである。水と関連させた事で、だんごづくり・ジュースに見立てたごっこ遊び等、遊びの内容にも変化が見られるようになった。

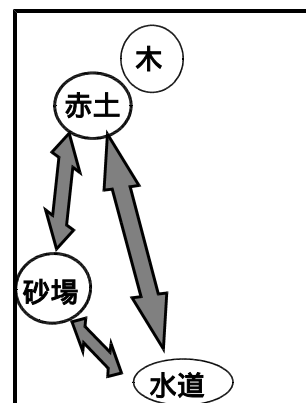


図1 幼児の動線

園庭の様々な砂や土とのかかわり

幼児と砂や土とのかかわりを大切にして、砂場の砂を1トン増やし、ダイナミックに砂とかかわれるようにした。また園庭にある主な砂に対し、しろほしちゃん(白砂)・くろくろまん(黒砂)・あかつちまん(赤土)と砂の色と関連させた名称をつける。そして「すなすな探検隊」と称し、園庭内を探索して周囲の様々な砂の存在に気付くように環境構成を工夫する。そうする事で、幼児は砂に対し愛称で呼びかけながら遊んだり、砂と赤土の特性の違いに気付き、幼児なりに考えて砂や土の特性を活かした遊びをするようになった。



写真 砂の名称づけ

新しい土との出会いの環境構成

今までの幼児の砂や土遊びの動線(図1)を活かしながら、粘土質の新しい土(島尻マージ)を赤土の隣にコーナーを設置する。(図2)

その後、島尻マージのコーナーから幼児の砂や土遊びの動線が園庭内に広がり、各砂のコーナーでも刺激を受け様々な遊びが活発に展開されるようになる。それにかかわる様子を、一人の幼児の遊びに取り組む姿から捉えてみる。

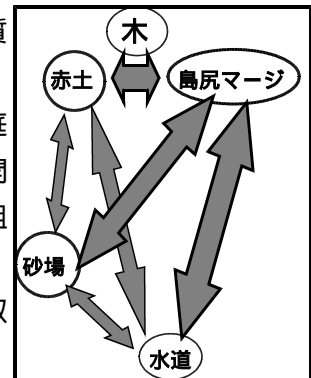


図2 幼児の動線2

島尻マージの補充後、Yさんはその土を使ってじっくりと遊びに取り組み、赤と茶色が混ざった土だんごをつくる。

Yさん：「だんごできたよ！」(出来た喜び)

教師：「どんな風にしたら、こんなすごいだんごが出来るのかな」

(Yさんの工夫を認める言葉かけ)

Yさん：赤土と島尻マージの土を交互に何回も指を差しながら

「あっち・こっち、あっち・こっちの土を一緒にしたらいいよ」

と嬉しそうに笑顔で返事をした。

幼児：興味・関心をもって、Yさん話を聞き、Yさんの土だんごの真似をしようと熱心に(5~6人)取り組んだ。

Yさん：なかなか土だんごがつかれず戸惑っている幼児に一生懸命づくり方を教えた。

教師：Yさんと他児のかかわりを大切にしながら、幼児と一緒に遊びにかかわった。

【考察1】

幼児が砂や土遊びを通して、砂や土の感触を楽しみ、その中で幼児なりの気付きや考え、工夫しながら遊ぶ楽しさを味わわせたいと考えた。そこで教師は、幼児に砂や土に興味・関心をもたせるため、身近な砂に対し幼児なりの名称をつけさせ、遊びの中に取り入れる事で、幼児が砂や土に愛着・親しみをもってかかわるきっかけになったと考える。

また、幼児の砂や土遊びの動線に配慮しながら、新たに島尻マージの土を補充しコーナーを設置して環境構成を工夫した。その際、教師と幼児が一緒になって土を運び補充したり、コーナーをプランターで囲む等、一連の作業を共にした事で、幼児は「自分たちの土である」と意識をもち積極的に土にかかわり、遊びにじっくりと取り組む姿につながったと考える。

特にYさんの砂と土遊びのかかわり方は、土に混ぜる水の分量の加減や赤土との混ぜ具合、手で握り固さ具合を調節したり、様々な大きさの土だんごをつくって大小の比較をする等、自

分なりの感覚で、砂や土の性質を捉えながら遊びに取り組んでいたと考える。自分なりに試行錯誤しながら遊ぶYさんの姿を教師が受けとめ、周囲の幼児に伝え共感し合い「だんごづくり名人」と認められた事が、Yさんの自信となり、他児に土だんごの作り方を教える等、意欲的な態度につながったと考える。



写真 島尻マージを使った土だんご

【手だて2】友達とかかわって遊ぶための援助の工夫

幼児一人一人が、自ら遊びを見つけ取り組むようになりつつあるので、個々の幼児の内面の動きを教師は受けとめながら、友達とかかわって砂や土遊びをする楽しさを味わえるよう援助の工夫をした。

【結果2】砂場道具「とい」を使い、友達とかかわって遊ぶ幼児の様子から

IさんとAさんは、赤土や島尻マージを使って土だんごづくりに夢中になって取り組んでいる。しかし、同じ場所にはいるが、二人のかかわりは見られなかった。

そこで、土遊びを通して二人のかかわる様子から捉えてみる。

Iさん：「見て！こんなにいっぱいできたよ！」

と大小数個のだんごをつくり「とい」の中に入れて運んでくる。

教師：「いろんな大きさのおだんごがあるね」

「いっぱいつくったから、こんな長いお皿（とい）がいるんだね」

（Iさんの工夫を認め、共感する言葉かけ）

Aさん：Iさんと教師のかかわる様子を側で見ていたが

「見せて！見せて！」

と興味を示し近づき、Iさんの「とい」に入った土だんごを見て

「すごいね！」「一緒につくろう」

とIさんに笑顔で声をかけ、二人で遊びはじめた。

～偶発的な出来事～

地面に置いたIさんの「とい」が、土の盛り上がり具合で斜めになってしまい土だんごが転がってしまう。

Iさん：偶発的な出来事に戸惑っていた二人だったが、一緒に話をしながら、何回か「とい」

Aさん の置き場所を変えたりしていた。しばらくすると「とい」を木の幹に斜めに置き「滑り台だよ！」

と上から土だんごを転がす遊びに変わった。

教師：「もっと遠くまで転がせたらいいね」「どうしたらいいかな？」

（互いに自分の考えを出し合い、さらにイメージが伝え合えるような発問をし、一緒に遊びにかかわる。）

幼児：「もっと斜めにしたら？」

（3～4人）「もっと長く『とい』をつなげたら、遠くに転がっていくかもよ」

と一連の二人の遊びを見て興味・関心をもった幼児が集まり、それぞれ自分のアイディアを伝える。そして、

「いいのがあったよ！」

等，別の大きさ・形の「とい」を持ってきて，行動で自分の思いを伝え遊びに一緒ににかかわりだした。

教師：「いいアイデアだね」「やってみようか！」

（工夫し合う姿を認め，時には手助けをし，一緒に遊びにかかわる。）

その後，IさんとAさんを含めた5～6人の幼児は「とい」を数個つなげたり，途中に筒型のパイプ管を置き，さらに「トンネルの道」として遊ぶ等，友達とかかわりながら同じ遊びを楽しんでいた。

【考察2】

幼児が，砂や土遊びに夢中に取り組みながら，他児の存在に気付き，お互いを受け入れながら一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう援助した。

Iさんは，自分なりに水の加減を調整し，試行錯誤しながら土だんごをつくり，「とい」をお皿に見立てる等，発想が豊かであった。教師は，Iさんに共感しながら遊びにかかわり，アイデアを活かして遊ぶIさんの姿を他児に伝える等，援助をした。その事に，Aさんが関心を示し，Iさんの魅力的で工夫された土だんごを見て「一緒に遊びたい」という気持ちにつながったのではないかと考える。

その後は，二人で土だんごづくりをするつもりだったと思われるが「とい」が斜めになり，土だんごが転がるという偶発的な出来事に，驚きながらも好奇心をもってかかわった事で「滑り台」に見立てて遊ぶ姿になったと考える。二人にとっては新たな気付きとなり，二人で「とい」の角度を変化させ工夫しながら遊び，喜びを共感し合う楽しさを味わういいきっかけになったと思われる。そして二人の遊びの一連の過程を受けとめ，教師が共感し助言・援助をした事で，話し合って遊びを進めていく楽しさ・自分達のよさを他の幼児に認められる嬉しさを味わったと考える。

また，周囲の幼児も，自分達のアイデアを二人が遊びに取り入れてくれた事で，安心して遊びに加わり，一つの遊びをみんなでする事の楽しさを味わえたと考える。

成果と課題

1 成果

- (1) 砂や土の補充や幼児の動線を活かしたコーナー設置をする等，環境構成を工夫する事によって，幼児の知的好奇心を刺激し，色々考え工夫し探究していこうとする意欲をもたせる事ができた。
- (2) 幼児の内面を読み取った援助の工夫をしていく事で，遊びを通して友達とかかわる楽しさを味わわせた。

2 課題

- (1) 砂や土遊びの年間指導計画（提案）の検証及び再構築。
- (2) 個々の知的発達の育ちを理解し，小学校以降の学びの力の基礎につなげる援助の工夫。

《主な参考文献》

「幼稚園教育要領解説」	文部省	フレーベル館	1999
「新しい幼稚園教育要領と実践事例集 第3巻」	無藤隆 編著	チャイルド本社	2000
「新たな幼稚園教育の展開」	小田豊 他編著	東洋館出版社	2003